

第5回ティーンズハート大賞《大賞》受賞作

奈月ゆう

ひ ま わ り

向日葵の 咲いた日



TEEN'S
HEART

奈月ゆう (なつき・ゆう)

講談社X文庫

1977年2月13日生まれ。A型。

趣味はピアノを弾くこと、カラオケで騒ぐこと。

兵庫県立総合衛生学院 看護学科第1部在学中。



ひまわり さ ひ
向日葵の咲いた日

なつき
奈月ゆう

●
1998年1月5日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 編集部 03-5395-3507

販売部 03-5395-3626

製作部 03-5395-3615

本文印刷—豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

カバー印刷—半七印刷株式会社

デザイナー—山口 馨

©奈月ゆう 1998 Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

講談社X文庫

イラストレーション／糸井美和

向日葵の咲いた日

1

’95年1月――。

14日から第2土曜日、成人の日、振り替え休日……と、冬休みの延長のような3連休。3年生は、大学入試センター試験に自己採点にと、受験まったただ中。

だけど、2年の私たちには受験なんて遠い先のことで、正月ぼけの抜けきらない頭で休日を満喫していた。

その連休も、最後となった日の朝。

「うーん、違うなあ」

日あたりのいいベランダで、私は、物置にしている低い棚の上にのせ、手すりに立てかけた1枚の絵をにらんでいた。

パレットの上に、黄色を出す。

筆にとって花びらの上に少し重ねてみたけれど、どうもイメージに合わない。



「まなみ、寒い。閉めるで」

部屋の中から首を突きだした奈緒が、そう言ったかと思うと、ピシヤツとガラス戸を閉めてしまった。

私にとっては気持ちのいいこの陽気も、人一倍寒がりの奈緒には耐えられないらしい。振りむくと奈緒は、ガラス戸にもたれかかって、背中に日射しを受けながら、編み物に熱中している。

奈緒の横には、いつのまに用意したのか、コーヒーとクッキーが置いてある。

ここが私の部屋だということを、忘れているみたい。

でも今は、そんなことに文句を言っている場合じゃない。

「どーしよ。できないよー」

少し白を混ぜた黄色も、思う色にならない。

この絵は、芸術の授業で選択している美術の課題だ。

冬休みの課題で、私の他にもうひとり、いつも期限を過ぎるまで提出しない男の子以外はみんな、5日前の授業で提出していた。

私が美術で提出期限に間に合わなかったのは今回がはじめてだったから、先生は目に見てくれて、「連休明けまで待ってやる」と言った。

それなのに、その日を明日に控えても、まだできあがっていなかった。

花」というテーマに、私の中には1つの景色が浮かんでいた。
真っ青な空と、真っ青な海。

それをバックに咲くヒマワリの花。

見たことはないけれど、私の憧れの景色だ。

どうしても絵にしたいのに、色が気に入らなかった。

もっとも、私は今まで気に入った色を作れたためしがない。

だけど、絵を描くことは好きで、去年も美術を選択していた。

下手の横好きというヤツだ。

「あー、もっとこう、鮮やかなのがいいのに……」

パレットに並べられていく青や黄の絵の具を、恨みがましい気持ちで見つめる。

いつもは授業の課題なんて、とにかく描いたら終わりなのに、これにだけは、なぜか執着してしまう。

今日の空は、私の中のイメージにとっても近いから、わざわざここで描いているのに、それにもむだになりそうだ。

「柏木、おまえ、まだできてなかったん？」

(わ……)

となりの部屋に下宿する一史が、ベランダ越しにのぞいてきた。

「提出、明日やろ？」

「そうなんだけど、思うようにできなくて」

一史は同じクラスで、美術の選択も一緒。

先週の提出日に、一史はハナマルのような花を1本描いて提出していた。

先生には「芸術作品や」とかなんとか言っていたけど、その日の朝に教室で描いていたことを私は知っている。

「そんなんテキストでいいやん」

「……………」

他の絵ならそうなんだけど、これはそういうふうにごまかしたくなかった。

「……？ あかんの？」

返事をしない私に、一史があきれている。

「そうや。竜介りゅうすけに見てもらえや」

（えっ!）

一史が、ひらめいたように叫ぶと、部屋の中へ入っていった。

「いいよ、自分でできるからっ」

手すりから降りだしてそう言ったのにもかかわらず、竜介が引つ張り出されてきた。
「なんでや。できな困るんやろ？ 竜介ならばucciアロバイスしてくれるで」

（知ってるわよ）

竜介も同じ美術選択で、席はとなりだ。

この連休中、竜介は親友の一史の部屋に泊まっていた。

「ほら、柏木。どこができへんのや」

「だから、いいって」

私と一史のやりとりを、竜介は困ったように見ている。

（もうー）

竜介に迷惑かけたくないのに。

「おい、一史。いいって言ってんだから……」

強引な一史を、竜介が引き止めるけれど、

「見せてみるって。ほら」

「あっ」

一史が、画板代わりの板に留めていた絵を、ベランダ越しにすばやく手にした。

「きれいやん。どこがあかんの？」

絵を眺めて、不思議そうに顔を上げる。

「空の青と、ヒマワリの黄色……」

私はあきらめて、絵を一史に任せた。

「竜介、おまえならどうする？」

「……ごめんね」

宿題くらい自分でしろと、思われているんじゃないかと心配になる。

竜介が、一史の横からのぞきこむ。

「俺は、このままでもいいと思うけど」

「うん、でも……」

無表情な竜介の感情が読めない。

やっぱりおかしいよね、たかが学校の課題に……。

「こだわってんだ。……わかるけどな、そういうの」

（え……？）

意外な返事に思わず見返すと、竜介が笑っていた。

「ほんとに？」

「まあな。俺もそんなところあるから。でも、俺やって、あんまり自信ないぞ」

「ううんっ。お願いっ」

「……しようがないなあ」

うなずいたら、竜介はまたちよつと笑って、一史から手わたされた私の絵をじつと見て考えこんだ。

（あーあ。こんな絵見られるなんて）
恥ずかしきで一史をにらんだけれど、なんにも気づかずに真剣に竜介の言葉を待っている。

「……このとこに、少し白混ぜてみたら？ 黄色は、赤を入れたらいいと思う……」
竜介は、絵を指さしながらペランダ越しにアドバイスをくれた。

「できそうか？」

「……うん」

「よかったな。明日、楽しみにしてるで」

絵の進行を本気で心配してくれているようだから、一史を怒ることもできない。

「じゃあな」

言うだけ言って、一史は嵐あらしのように去ってしまった。

「がんばってな」

一史に続いて、竜介も部屋に引きあげた。

（あ……）

「ありがとっ」

竜介の言葉に、救われたような気持ちになった。

（——ホントだ）

竜介の言ったとおり、色を作ると、理想のできに仕上がっていく。
塗りながら、感心する。

いつだって、そうなんだ。

竜介が作る色は、私の理想そのままだ。

美術の時間、竜介の描く絵に何度も驚かされた。

私が描けないでいたものを竜介が描いてくれることが、いつもはうれしい。
だけど、この絵は自分で作ってみたかったのにな。

「へえ。いい絵やん」

部屋に戻ると、奈緒が感心したように絵を眺めた。

「絵はがきかなんかの景色？」

「ううん。想像だけど」

「ふうん」

チェストの上に立てかけてみる。

このまま飾っておくのも悪くない。

一史のおせっかいに、ちよつと感謝しようかな。

「それより、奈緒はできたの？」

「へっへー」

意味ありげな笑み。

「見てよ」

奈緒が、手にしていた毛糸を差し出した。

広げてみると、ていねいに編まれたマフラーと手袋だ。

「うまくできたね」

素直な気持ち^{すなお}を言ったら、ニンマリと笑顔になった。

奈緒は、ちよつど1か月後のバレンタインに、このマフラーたちを池上先輩^{いけがみせんぱい}にわたすつもりだ。

1年近く片思いをしていたけれど、先輩はもうすぐ卒業してしまう。

ちゃんと思いを伝えたいと、告白を決心したんだ。

12月から編みはじめて、やっと完成した。

連休の前日、私の部屋に泊まりにくるというから、なにをしようかと考えていたのに、

奈緒は3日間ずっと編み物三昧^{さんまい}だった。

だけど、一生懸命^{いっしょうけんめい}な奈緒をかわいいと思う。

「ホントに、竜介になにもせえへんの？」
奈緒が、念をおすようにたずねてきた。

「ん……」

答えながら、絵を見直す。

鮮やかな黄色が青に映えていた。

理想の絵に、いっきに近づいた。

（うまいよな）

改めて、竜介の色の感性に気づかされる。

竜介は、となりに住む一史の親友で、1年のときから知っていた。

挨拶くらいはしていたけれど、その程度の仲だった。

1、2年とも、クラスは違った。

竜介は理系を選択したから、3年も一緒のクラスにはなれない。

2年の選択美術で、同じ教室になることはないと思っていたのに、となりの席にいた。
はじめての授業で、「よろしく」とだけ言った。

だけど、授業が進むにつれて、私は竜介の描くものにどんどんひかれていくのに気がつ
いた。

とくに、色使いが気に入っていた。

私が出したくても出せないでいた色を、竜介の絵に見ることができた。

芸術の授業なんて、半分息抜きだよ……という子が多い中で、「嫌いじゃないから」といつもまじめに授業に取り組んでいた。

そのうちに、美術だけでなく、廊下や食堂で見かけることがうれしくなった。

所属しているサッカー部の試合の応援に、クラスの子に交じって行ったこともある。

自分でも自分の気持ちがよくわからなくて黙っていたのに、驚いたことに、奈緒はいち早く、私の中の変化に気づいた。

それが夏休み前だったから、もう、半年以上は竜介を見ていたことになる。

当然、今回のバレンタインには、奈緒から誘いがあった。

「一緒にがんばろうよ」そう言ってくれる奈緒には悪いけれど、私は今のままの関係がよかった。

学校はあと1年あるし、もう少し、このままでいいと思っていた。

「これからどっか行こうか。天気いいし」

お昼を前にして、奈緒が提案した。

出かけることのあまり好きじゃない奈緒がそう言うほどの、晴天が広がっていた。